

水稻低アミロース米新品種「ゆきむすび」の栽培法

古川農業試験場

1 取り上げた理由

平成18年度に本県水稻奨励品種として採用された早生の低アミロース品種「ゆきむすび」（系統名「東北181号」，普及に移す技術第82号）は，冷めてもおいしく，耐冷性も“極強”であることから，山間高冷地でも良食味米が生産できると期待されている。そこで，「ゆきむすび」を安定生産するための栽培法について目安が得られたので，参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 追肥は，減数分裂期に窒素成分で2kg/10a程度とする。減数分裂期追肥では登熟歩合が向上し，玄米千粒重も増加する。また，青未熟粒及び青死米粒の発生が少なく，外観品質がよい（図1，表1）。
- 2) 幼穂形成期追肥では籾数の増加により増収するが，青死米粒の発生が多い。また，稈長が伸びる。幼穂形成期及び減数分裂期ともに追肥を行うと，その傾向は大きい（図1，図2，表1）。
- 3) 栽植密度17株/m²～21株/m²の範囲では，収量及び青未熟粒と青死米粒の発生に差はみられない（図3）。

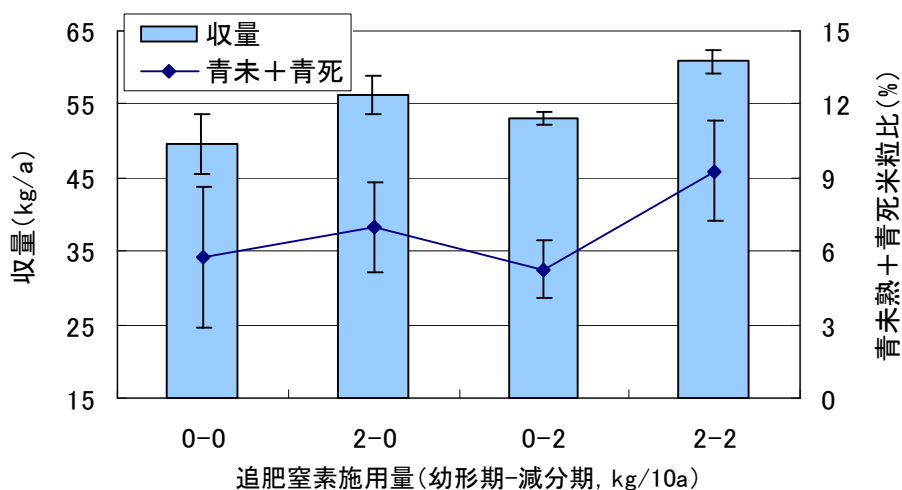


図1 追肥時期と収量及び青未熟粒＋青死米粒比の関係

注1) 平成19年，20年の平均値（図中のバーは標準誤差）。

注2) 収量は1.9mm以上の値（水分15%換算）。

注3) 青未熟粒及び青死米粒比は，穀粒判別器（S社製RGQI10A）で測定。

3 利活用の留意点

- 1) 本試験は大崎市鳴子温泉鬼首中川原地区（標高300m）で行っており，基肥は10a当たり窒素成分で6kgである。
- 2) 「ゆきむすび」の特性については，普及に移す技術第82号を参照のこと。
- 3) 耐倒伏性が“中”なので，稈長が伸びやすい幼穂形成期追肥は避ける。

（問い合わせ先：古川農業試験場水田利用部 電話0229-26-5106）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新品種栽培法の早期確立（ゆきむすび）平成18年～20年度

2) 参考データ

表1 追肥区別収量構成要素及び品質

追肥窒素施用量 幼-減(kg/10a)	収量 (kg/a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	粒数 (千粒/m ²)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	稈長 (cm)	穂長 (cm)
0-0	49.6	436	61.8	26.9	78.3	23.5	71.8	16.5
2-0	56.2	450	65.3	29.4	79.7	24.0	73.6	17.5
0-2	53.1	415	64.6	26.9	82.2	24.4	71.9	17.2
2-2	60.9	488	71.2	34.7	72.1	24.5	79.0	18.8

追肥窒素施用量 幼-減(kg/10a)	玄米 乾物(%)	アミロス 乾物(%)	玄米 白度	青未熟 (%)	青死米 (%)	外観品質 (1-9)
0-0	6.9	12.2	22.8	0.2	5.6	4.3
2-0	7.4	11.8	23.0	0.2	6.8	4.0
0-2	7.4	11.8	23.5	0.0	5.2	3.8
2-2	8.3	11.8	23.6	0.1	9.2	4.3

注1) 平成19年, 20年の平均値。

注2) 収量, 登熟歩合, 千粒重は1.9mm以上(水分15%換算)。

注3) 玄米玄米含有率は近赤外米食味品質分析計(N社製6500), アミロス(90~91%搗精)はオートアナライザ[®]-II型(B社製), 玄米白度は白度計(K社製C300), 青未熟, 青死米粒比は穀粒判別器(S社製RGQI10A)で測定。

注4) 外観品質は, 1(上の上)~9(下の下)の9段階で評価。

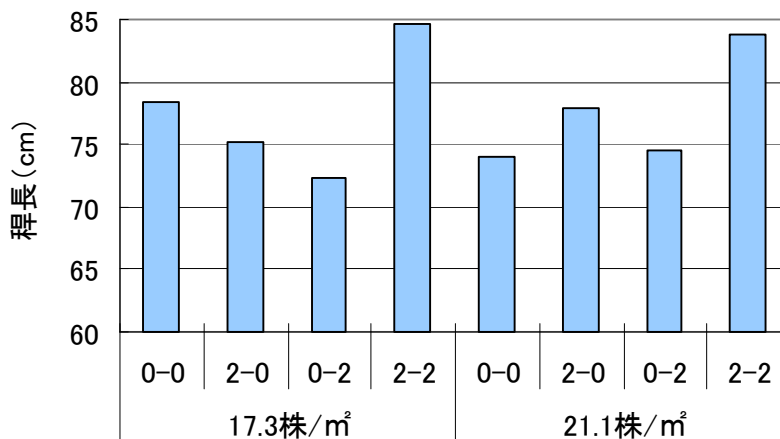


図2 栽植密度と追肥が稈長に及ぼす影響

注) 平成20年データ, 倒伏はなし(追肥窒素施用量: 幼形期-減分期, kg/10a)。

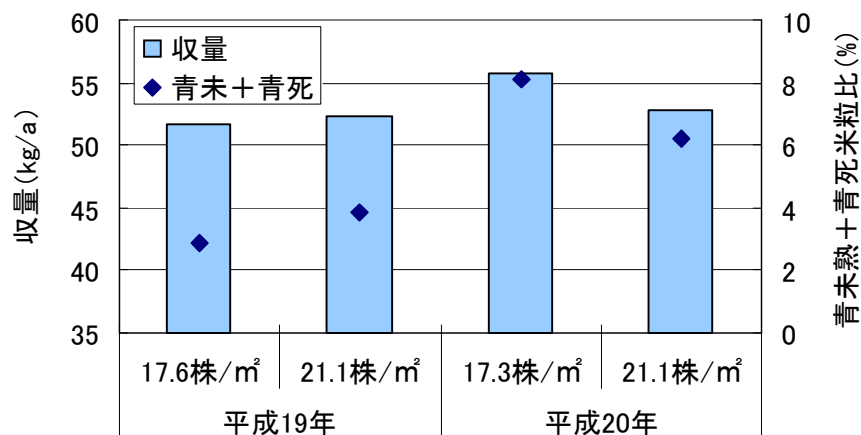


図3 栽植密度と収量及び青未熟粒+青死米粒の関係

注1) 追肥窒素施用量: 幼形期0, 減分期2kg/10a。 注2, 3) 図1に同じ。

3) 発表論文等 なし